

第一回 社会同和教育講座から・・・



6月16日(日曜日)第二集会所において、みえ人権教育・啓発研究会の代表 松村智広さんから「あした元気になあ

れ」を演題に語っていただきました。お話は先生の著書「あした元気になあれ 部落に生まれてよかった」「続 あした元気になあれ 人間ってええなあ、いきてるっておもしろいな」に収められているご自身の生い立ちと被差別体験を明るく、ユーモアをたっぷり交え、笑いで差別を吹き飛ばそうとの思いで語って頂きました。その講演の一部を紹介します

祖母のこと、父母のこと 一度でいいから「おかあさん」と呼んでみたかった

私は三重県の被差別部落に生まれた。6才で母を亡くし、父親と祖母に育てられた。だから年に一度やってくる「母の日」は大嫌いだ。ほかの子の胸には赤いカーネーションなのに、私だけが胸に白いカーネーションをつけた。そのカーネーションをぶつけてやりたいほどだった。参観日もイヤだった。来ている人のほとんど全員が母親で、私は祖母が来ていたので、みんなからからかわれた。せつかく歩いてやって来てくれた祖母の気持ちも分からず「帰れ」と学校の玄関で追い返したこともあった。私の頭の中に母との思い出はない。「お母ちゃん」と呼んだ記憶すらない。母と死別して33年目、父は60才の誕生日を待つようにして母のもとへ旅立っていった。生活がきつい、仕事がきつい、差別がきついといった。きついづくしの毎日のなかで、父はさびしさをまぎらわすかのように、ときにはわざと自分自身を痛めつけるかのように酒を飲んでた。そんな父が肝臓を壊して三年半の間に七回の入退院を繰り返したが、一度も自分の地区名を名乗ることはできなかった。「貧乏や病気はなんぼでもがまんできるけど、差別はがまんならん」と言っていた。差別は人間としての誇りまで奪ってしまう。差別により貧乏で学校に行けず、教育を奪われた父親のことを、何も分からずに責め続けた自分。部落に生まれた自分が、差別が一番見えるはずなのに、その自分が、部落差別の罨にはまり、親を憎んで、ふるさとを恨んで、自分自身をも否定して生きてきた。差別をされてきた悔しさよりも、差別を許してきたことのほうがもっと悔しかった。

差別はきつとなくせる ばあちゃんのほうが本物の教育者

徳島県の中学生に、自分の生い立ちを語るなかで差別によって文字を奪われて、識字学級でその文字を奪い返している祖母の話をした。しばらくすると、勉強が苦手なゆかちゃんという女の子から手紙がきた。差別によって奪われた文字を奪い返している祖母の姿に、共感し、勉強から逃げずに自分の夢である保育士になるために

頑張っているという内容の手紙だった。祖母は「十五であきらめたらあかん」とつぶやき、震える手で鉛筆を握り、手あかと涙でつぶられた手紙の文通が始まった。ゆかちゃんはそろばんの全国大会で2位になった。三度目の手紙に「高校合格」という文字を見つけたときの祖母は「よかった。よかった」と、涙ぐんで喜んでた。文字を持っている私にないものを、祖母はもっていた。祖母が、ゆかちゃんに「元気」と「やる気」を与えた。ばあちゃんのほうが本物の教育者や・・・。

